『上蔡語録』巻上訳注（三）

原　信太郎　アレシャンドレ

本稿は北宋 謝良佐（字は顕道、号は上蔡、一〇五〇～一一二〇？）の語録『上蔡語録』に訳注を施すものであり、「『上蔡語録』巻上訳注（二）」（『論叢 アジアの文化と思想』アジアの文化と思想の会、第三一号、二〇二三）の続稿である。今回訳注を施した範囲は巻上の［一七］～［二四］条である。「訳注（一）」に記した「凡例」は、本稿においても踏襲するので参照されたい。

［一七］

本文

邵堯夫直(1)是豪(2)才。嘗有詩云、當年志氣欲横秋、今日看來甚可羞。事到強爲終屑屑、道非心得竟悠悠。鼎中龍虎忘看守、碁(校1)上山河廢講求(3)。又有詩云、斟有淺深存燮理、飲無多少繫經綸。卷舒萬古興亡手、出入千重

雲水身[4]。此人在風塵時節、便是偏[5]覇手[6]段。學者須是天人合一始得。邵堯夫有詩云、萬物之中有一身、一身中有一乾坤。能知造化備於我、肯把天人別立根。天向一中分體用、人於心上起經綸。天人安有兩般義、道不虚行只在人[7]。問、此詩如何。曰、説得大體亦是、但不免有病。不合説一中分體用。又問曰、此句何故有病。謝子因曰、昔富彦國[8]問邵堯夫云、一從甚處起。邵曰、公道從甚處起。富曰、一起於震[9]。邵曰、一起於乾[10]。問、兩説如何。謝曰、兩説都得。震謂發生、乾探本也。若會得天理、更説甚一二。

校勘

（校１）正誼堂本は「碁」を「棊」に作る。

口語訳

（謝良佐がいった、）「邵堯夫（邵雍）の才覚は本当にずばぬけている。以前、次のような詩を作った、『壮年時は志気がこの秋空を蓋わんとするほどであったが、今から思えば恥ずかしい限り。物事は無理に行おうとすれば仕舞いにはせかせかしてしまい、道はこれを心に会得するのでなければ果てはとりとめのないものになってしまう。（私にとって）風雨など自然現象は、鼎のなかにあるものの如くであって、見守ることすら忘れ、山河などは碁盤のうえに乗っているものの如くであって、究明する必要もない』と。また次のような詩を作った、『酒を注ぐには浅深となく世を治める道理が含まれ、酒を飲むには多少にか

かわらず治世のことに関わる。この手は千年万代の治乱興亡の歴史をも自由に取り扱い、この身は千にも重なる雲や水にも自在に往来する』と。この人物は戦乱の世であったならば、一方の雄となったであろうほどの器量だ。学ぶ者は天人合一の境位に立たねばならない。邵堯夫にはさらに次のような詩がある、『万物のなかに一身が含まれてあるが、その一身のなかにはまたそれぞれ乾坤が宿っている。造化の働きが己のなかに備わっていることを知ったならば、どうして天と人とを別々にして分離させようか。天は一のなかで体と用とに分かれ、人は心を起点として天下を治める。天と人と、なんで異なった意義があるであろう。道はよりどころなく行われるのでなく、人がそれを体現していくのである』と」と。

質問した、「この詩はいかがでしょうか」と。

（謝良佐が答えて）いった、「事のあらましはいいえているが、しかし欠点があるのを免れない。『一のなかで体と用とに分かれる』というべきではない」と。

また質問した、「この一句になぜ欠点があるのでしょうか」と。

そこで謝良佐がいった、「昔、富彦国（富弼）が邵堯夫に尋ねていった、『一はどこから始まるのでしょうか』と。邵氏がいった、『貴殿はどこから始まるとお考えか』と。富弼がいった、『一は（『易経』にいう）震の卦から始まる』と。そこで邵氏がいった、『一は乾の卦から始まるのである』と」と。

質問した、「二つの説はいかがですか」と。

謝良佐がいった、「双方ともよろしい。震の卦は発生を表現しているのであり、乾の卦は根源を究明し

ているのであるから。だがもし天理を会得したならば、一や二やを語る必要があろうか」と。

注

（1）邵堯夫―北宋　邵雍（字は堯夫。号は安楽先生。諡は康節。一〇一一～一〇七七）のこと。詩人・学者。易に通じ、文王の著した易を後天易、伏羲の著した易を先天易として先天卦位図を作る。富弼・司馬光・呂公著らと洛中に従遊し、その居を安楽窩といい、その学派を百源学派という。著に『皇極経世書』『伊川擊壤集』『先天図』などがある。

（2）直是―現代語「簡直是」に相当する強調の副詞で、まったくもって、本当に。田中謙二『朱子語類外任篇訳註』（汲古書院、一九九四）第一一七頁を参照。本篇巻上［一九］条に「看他胸懷直是好、與曾點底事一般」とあり、『語類』巻四四に「聖人直是如此瀟灑、正如久病得汗、引箭在手、忽然破的也」とある。

（3）當年志…廢講求―『伊川擊壤集』巻三「歳暮自貽」詩に「當年志意欲横秋、今日思之重可羞。事到強圖皆屑屑、道非眞得盡悠悠。静中照物情難隱、老後看書味轉優。談塵從容對賓客、薦章重疊誤公侯。已蒙賢傑開青眼、不顧妻孥怨白頭。谷口鄭眞焉敢望、壽陵餘子若爲謀。鼎間龍虎忘看守、棊上山河廢講求。一杭晴窻睡初覺、数聲幽鳥語方休。林泉好處將詩買、風月佳時用酒酬。三百六旬如去箭、肯教襟抱落閑愁」とある。

（4）又有詩…雲水身―『伊川擊壤集』巻三「安樂窩中酒一樽」詩に「安樂窩中酒一樽、非唯養氣又頤眞。頻頻到口微成醉、拍拍滿懷都是春。何異君臣初際會、又同天地乍絪紜。醺酣情味難名狀、醞釀工夫莫指陳。斟有淺深存燮理、飲無多少寄經綸。鳳凰樓下逍遥客、郟鄏城中自在人。高閣望時花似錦、小車行處草如茵。卷舒萬世興亡手、出入千重雲水身。雨後静觀山意思、風前閑看月精神。這般事業權衡別、振古英雄【一本作豪】恐未聞」とある。

（5）偏覇―一地方を占拠して王を称すること。一方のはたがしら。

（6）手段―能力や技量、手腕などの意。

（7）萬物之…只在人―『伊川擊壤集』巻四「觀易吟」詩に「一物其來有一身、一身還有一乾坤。能知萬物備于我、肯把三才別立根。天向一中分體用【又云造化】、人於心上起經綸。天人焉有兩般義【又云事】、道不虚行只在人」とある。

（8）富彦國―北宋 富弼のこと。本篇［一四］条注（9）に既出。

（9）震―『易経』震卦のこと。説卦伝に「帝出乎震、齊乎巽、相見乎離、致役乎坤、説言乎兌、戰乎乾、勞乎坎、成言乎艮。萬物出乎震」とある。

（10）乾―『易経』乾卦のこと。彖伝に「彖曰、大哉乾元、萬物資始、乃統天。雲行雨施、品物流形」とあり、「乾元」より万物が発生することが説かれている。

［一八］

本文

問、堯夫所學如何。謝曰、與聖門卻不同。問、何故卻不同。曰、他也只要見物理、到逼眞處不下工夫、便差卻。何故卻不著工夫。曰、爲他見得天地進退、萬物消息之理、便敢做大、於聖門下學上達(1)底事、更不施工。堯夫精易之數、事物之成敗始終、人之禍福修短、算得來無毫髮差錯。如措此屋便知起於何時、至某年月日而壞、無不如其言。然二程不貴其術。堯夫喫不過(2)、一日問伊川曰、今歲雷從甚處起。伊川曰、起處起。如堯夫必用推算、某更無許多事。邵即默然(3)。邵精於數、知得天地萬物進退消長之理、便將此事來把在掌握中、直敢做大、以天自處。如富彥國、身都將相、嚴重有威、衆人不敢仰視、他將做小兒樣看、直是不管你、也可謂豪傑之士【仰下原本有觀字、今從言行録(校1)(4)】。

校勘

（校1）正誼堂本は小字注「仰下原本有觀字、今從言行録」がない。

口語訳

質問した、「邵堯夫（邵雍）の学問はいかがでしょうか」と。

謝良佐がいった、「聖人の学問とはもとより異なったものである」と。

質問した、「どうして異なっているのでしょうか」と。

（謝良佐が）いった、「彼は物の理を知ろうとするばかりで、確かなところについては工夫を加えなかったので、誤ったのだ」と。

（質問した、）「どうして工夫を加えなかったのでしょうか」と。

（謝良佐が）いった、「彼がこの世の変化や万物の盛衰の道理を窺いえたために、尊大になり、聖人の学問の、下学上達の業にはまったく工夫を加えなかったのだ。堯夫は易の数理に通暁しており、物事の成功と失敗、始めと終わりや、人の災難と幸福、寿命の長短は、推測して少しの誤りもなかった。ある家屋が、いついつに建築されて何年何月何日に壊されるかを推測するようなことに関しては、彼の言がはずれたことはない。けれども程顥・程頤二先生はその技術を重んじなかった。堯夫は納得できず、ある日、伊川程頤先生に『今年は、雷はどこに起こるでしょうか』と尋ねた。程頤先生は『起こるところに起こる。君だったら必ず計算し占うだろうがね、私にはそんな面倒なことはないのだ』といった。邵氏は黙り込んでしまった。邵氏は象数に精通しており、天地万物の変化盛衰の道理を理解するや、ただちにこれをもって手中に握りしめ、あろうことか尊大に構え、天をもって自ら任じていた。富彦国（富弼）に至っては、身分は将軍や宰相の位にあって、厳粛重厚でいかめしく、人々は仰ぎ見る勇気すらなかったが、堯夫は彼を子供のように扱い、まったく自分と関係ないかのようであった。やはり豪傑の士と評すべきだ」と。

【原本では「仰」字の下に「観」字があるが、今は『宋名臣言行録』に従う。】

注

（1）下學上達―『論語』憲問篇に「子曰、莫我知也夫。子貢曰、何爲其莫知子也。子曰、不怨天、不尤人、下學而上達。知我者其天乎」とあり、本篇巻上［三二］条に「謝子曰、道須是下學而上達、始得。不見古人就灑掃應對上做起」とある。

（2）喫不過―納得できない、承服できない、辛抱しきれないなどの意。『語類』巻四四に「如人相訟、初間本是至沒緊要底事、喫不過、胡亂去下一紙狀」などとある。

（3）一日問…即默然―『程氏遺書』巻二一上に程頤の記事として「邵堯夫謂程子曰、子雖聰明、然天下之事亦衆矣、子能盡知邪。子曰、天下之事、某所不知者固多。然堯夫所謂不知者何事。是時適雷起、堯夫曰、子知雷起處乎。子曰、某知之、堯夫不知也。堯夫愕然曰、何謂也。子曰、既知之、安用數推也。以其不知故待推而後知。堯夫曰、子以爲起於何處。子曰、起於起處。堯夫瞿然稱善」と、ここと同じ逸話が載っている。また、本篇巻下［一二］条にも「因説今年雷起某處、伊川云、堯夫怎知。某便知。又問、甚處起。伊川云、起處起。堯夫愕然」と類似の逸話が録されている。

（4）仰下原…言行録―南宋 李幼武編『宋名臣言行録』外集巻五「邵雍康節先生」に「上蔡云、堯夫直是豪才、在風塵時節便是偏覇手段。如富公身都將相、嚴重有威、人不敢仰視、他將做小兒樣看」とあるのを指すと考えられるが、李幼武は朱熹よりも後の人であるから、この注は朱熹によるもので

はない。

［一九］

本文

學者須是胸懷擺脱(1)得開、始得有見。明道先生在鄠縣作簿時(2)、有詩云、雲淡風輕近午天、傍花隨柳過前川。旁人不識予心樂、將謂(3)偸閒學少年(4)。看他胸懷直是好、與曾點底事(5)一般。先生又有詩云、閒來無事不從容、睡覺東窗日已紅。萬物靜觀皆自得、四時佳興與人同。道通天地有形外、思入風雲變態中。富貴不淫貧賤樂(6)、男兒到此是豪雄(7)。問、周恭叔(8)恁地放開、如何。謝曰、他不是擺脱得開。只爲立不住、便放卻。忒早在裏(9)。明道門(10)擺脱得開、爲他所過者化(11)。問、見箇甚道理便能所過者化。謝曰、呂晉伯(12)下得一轉語(13)好。道、所存者神(14)、便能所過者化。所過者化、便能所存者神。横渠云、性性爲能存神、物物爲能過化(15)。甚親切。

口語訳

「学ぶ者は、胸中が旧来のしがらみを抜け出し自由になってこそ、始めて覚る所があろう。明道程顥先生は鄠県にて主簿の職にあった時に詩を作っていった、『雲が青空に薄くかかり、そよ風の吹き渡る昼間近の時刻、花々に寄り柳並木に沿って、前を流れている川べりを歩く。通りすがりの人は私の心中の楽しみを知らず、暇を見つけては若者のまねをして花柳の遊をなしていると思っていることであろう』と。

先生の胸中は、まったくすばらしい。かの曽点の故事と同じである。先生はまた詩を作っていった、『平素から何事につけてもゆったりとした気持ちで接することができるようになり、眠りから覚めた時にはもう日が東の窓にあかあかと輝いている。万物を静観すればすべてが各々のあるべきありように落ち着いており、うつりゆく四季の趣きは生々としたわが心の流動と同じである。わが道はこの世の有形のものから無形のものまで一切に通じわたり、思いは風雲など万物一つひとつの変化について精微を尽くしていく。いかなる富貴にも心をかき乱されず、貧賤のなかにあっても心楽しい、男児たるものここにいたってこそ豪傑といえよう』と」。

質問した、「周恭叔（周行己）はこれらの詩のようにのびやかですが、いかがでしょうか」と。

謝良佐がいった、「彼は束縛から抜け出し自由になっているわけではない。そこに止まり続けることができなかったため、放恣になってしまったに過ぎない。（見識が進むのが）早すぎたためである。程顥先生が束縛から抜け出し自由であったというのは、先生が『過ぐる所の者は化す（通り過ぎる所の人々はその徳に感化された）』からである」と。

質問した、「どのような道理を覚れば『過ぐる所の者は化す』ということが可能となるのでしょうか」と。

謝良佐がいった、「呂晋伯（呂大忠）が絶妙な一語でもってこれを表現している。彼は『『存する所の者は神（心に存するものが神妙）』であるならば、『過ぐる所の者は化す』のである。『過ぐる所の者は化

す』のであれば、『存する所の者は神』なのである』といった。また、張載が『自己本来の性を尽くしているのを、心に神妙を存することができているとし、事物の本性を尽くしているのを、通り過ぎるところのものを感化できているとする』といったのは、たいへん懇切丁寧である」と。

注

（1）擺脱―束縛や古い習慣など、悪い状態から抜け出す意。『語類』巻八に「今人言道理、説要平易、不知到那平易處極難。被那舊習纏繞、如何便擺脱得去」とある。

（2）明道先…作簿時―「鄠縣」は、永興軍路京兆府に属する県。現在の陝西省鄠県の北。程顥は若い頃、鄠県の主簿を務めたことがあった。『河南程氏文集』巻一一「明道先生行狀」に「踰冠、中進士第、調京兆府鄠縣主簿」とある。主簿とは、各署にあって文書帳簿を管理する官のこと。

（3）將謂―思い違いをする、誤解をするなど、多く事実と合わない判断を表すときに用い、「將爲」とも表記される。王鏻『詩詞曲語辞例釈（第二次増訂本）』（中華書店、二〇一五）一五八～一六〇頁を参照。

（4）有詩云…學少年―『河南程氏文集』巻三に「偶成【時作鄠縣主簿】」と題して同詩が掲載される。

（5）曾點底事―本篇巻上［一六］条注（17）に既出の『論語』先進篇の語を指す。

（6）富貴不淫貧賤樂―「富貴不淫」は、『孟子』滕文公下篇「富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈」、

「貧賤樂」は、『論語』学而篇「子貢曰、貧而無諂、富而無驕、何如。子曰、可也。未若貧而樂、富而好禮者也」をそれぞれ踏まえる。

（7）先生又…是豪雄―『河南程氏文集』巻第三に「秋日偶成二首」の其一として同詩が載る。

（8）周恭叔―北宋　周行己（字は恭叔。号は浮沚先生）のこと。永嘉の人。程頤と呂大臨に師事した。著に『浮沚集』八巻があり、永嘉学派の先駆者としても知られる。『程氏外書』巻一二に「周恭叔【行己】自太學早年登科、未三十、見伊川、持身嚴苦、塊坐一室、未嘗窺牖。幼議母黨之女、登科後其女雙瞽、遂娶焉、愛過常人。伊川曰、某未三十時、亦做不得此事。然其進鋭者其退速。毎嘆惜之」とあるによると、若くして見識があったが、それ故に程頤から「進むこと鋭き者は其の退くも速かなり」と心配され、果たして後年「會伊川有涪陵行。後數年、周以酒席有所屬意、既而密告人曰、勿令尹彦明（＝尹焞）知。又曰、知又何妨、此不害義理。伊川歸洛、先生（＝尹焞）以是告之。伊川曰、此禽獸不若也、豈得不害義理【又曰、以父母遺體偶倡賤、其可乎】」と、程頤の留守中、酒席において娼妓に思いを寄せたことから、程頤から批判されたことがあった。

（9）忒早在裏―周行己があまりに早熟であったがために、かえって後年、身を持ち崩してしまったこと。「裏」は動作・状態の存在を表す句末の助詞、本篇巻上［一四］条注（7）に既出。類似の表現として、本篇巻上［五五］条に「伊川曰、近日事如何。某對曰、天下何思何慮。伊川曰、是則是有此理、賢却發得太早在」とある。

(10) 門―和刻本に付される頭注に「門字、疑誤」とあるに従い、訳出しなかった。

(11) 所過者化―『孟子』尽心上篇に「孟子曰、霸者之民、驩虞如也。王者之民、皞皞如也。殺之而不怨、利之而不庸、民日遷善而不知爲之者。夫君子所過者化、所存者神、上下與天地同流、豈曰小補之哉」とある。

(12) 呂晉伯―呂大忠のこと、本篇巻上［一六］条注（7）に既出。

(13) 一轉語―一回の発話。「轉」は回数をいう量詞。『臨済録』に「師云、飯頭不會。請和尚代一轉語」とあり、『語類』巻四に「又言、犬之性猶牛之性、牛之性猶人之性與。不知人何故與牛犬異。此兩處似欠中間一轉語」とある。

(14) 所存者神―注（11）に既出の『孟子』の語。

(15) 横渠云…能過化―張載『正蒙』神化篇に「敦厚而不化、有體而無用也。化而自失焉、狥物而喪己也。大徳敦化、然後仁智一而聖人之事備。性性爲能存神、物物爲能過化」とある。

［二〇］

本文

古詩、即今之歌曲。今人唱曲、往往能使人感動、至學詩、卻無感動興發處。只爲泥卻章句故也。明道先生善言詩。他又渾不曾章解句釋、但優游玩味、吟哦(1)上下、便使人有得處。瞻彼日月、悠悠我思。道之云遠、

曷云能來[2]、思之切矣。終曰百爾君子、不知德行。不忮不求、何用不臧[3]、歸於正也。詩云、鳶飛戾天、魚躍於淵[4]、猶韓愈謂魚川泳而鳥雲飛[5]、上下自然各得其所也。詩人之意、言如此氣象。周王作人[6]似之。子思之意、言上下察也[7]。猶孟子所謂[校1]必有事焉、而勿正[8]、察見天理、不用私意也。故結上文云、君子語大、天下莫能載、語小、天下莫能破[9]。今人學詩、將章句横在肚裏。怎生得脱【一此下有迺云字】。莫道[10]章句、便將堯舜横在肚裏、也【一此下有即字】不得。

校勘

（校1）四庫全書本は「所謂必」の下から本篇巻上［二四］条「蓋世底」の上までがなく、［二〇］条と［二四］条とが繋がっている。

口語訳

古代の詩は、現在の歌曲と同じである。いまの人が歌をうたう時は、しばしば聞くものを感動させることができるが、『詩経』を学ぶ場合には、かえって感動して奮い立つことがない。それは章句、つまり一字一句の解釈に拘泥するからである。明道程顥先生は『詩経』の講釈に秀でていた。先生は字句や章段ごとの解釈をまったくなされず、ただゆったりと玩味し、節をつけて読み下して、そのままひとを覚らせた（それは次のような具合である）。

（『詩経』邶風・雄雉にいう）「彼の日月を瞻（みる）ればば、悠悠たり我が思い。道の云（ここ）に遠き、曷（いつ）か云（ここ）に能く來たらん（過ぎ去りゆく日と月とを見るにつけ、遙かに思いは募る。夫と私とを隔てている道のりは遠い、一体いつになったら夫は遠征から帰るのか）」は、痛切な思いである。この詩の最後に「百爾の君子は、徳行を知らず。忮（そこな）わず求めざれば、何を用（もち）ってか臧（よ）からざらん（もろもろの君子たちは、道徳のなんたるかを知らない。人に害を与えず、無理な要求をしなければ、悪いことはなくなるはず）」とうたっているのは、正義に帰着しているのである。『詩経』（大雅・旱麓）に「鳶 飛びて天に戻（いた）り、魚 淵に躍る（鳶は飛んで天まで届き、魚は深い池で跳ね上がる）」とあるのは、ちょうど韓愈がその文章のなかで「魚が川を泳ぎ、鳥が雲間を飛ぶ」と述べているようなもので、上より下に至るまでみんな、自ずとそのよろしきを得ていることをいう。古代の詩人の真意は、このような雰囲気をいわんとしたのである。周王はこのように民を教化したのである。子思がこの句を『礼記』中庸篇に引用した真意は、道は「上下に察（あきら）か」であることをいわんとしたのである。ちょうど孟子のいわゆる「必ず事とする有りて正（あて）にすること勿れ（義を集める努力はするが、その効果をあてにしない）」のと同じで、天理をはっきりと見て、私意を廃するということである。こういう訳で、（子思は）上述の文を結んで「君子 大を語れば、天下に能く載するもの莫く、小を語れば、天下に能く破るもの莫し（君子が大きいことを論じたならば、どこにもそれを載せうるものがないほど極大で、小さいことを論じたならば、誰もこれ以上分割することができないほど極微である）」というのである。

（以上が程顥先生の説き方であるが、他方で）いまの人が『詩経』を学ぶときは、心中が章句で覆われてしまっている。どうして束縛から自由になることができようか【あるテキストでは、この下に「廼云（そこでいった）」の字がある】。章句はいうに及ばず、たとい心中が堯舜で覆われてしまっても、やはり【あるテキストでは、この下に「即（つまり）」の字がある】だめだ。

注

（1）吟哦―節をつけて詩詞を吟じる。詩詞を作る意になることもある。

（2）瞻彼日…云能來―『詩経』邶風・雄雉に「瞻彼日月、悠悠我思。道之云遠、曷云能來。百爾君子、不知德行。不忮不求、何用不臧」とある。『毛詩正義』巻二によると当該詩は淫乱で国事を顧みず、民を遠征へと使役した衛の宣公を非難するものである。ここは夫を遠征へとかり出された婦人が大夫たちを批判したパートで、『正義』に準拠すると「在朝の君子がたよ、私は道徳のなんたるかなど知りません。けれども夫は人様を憎み陥れることも、完璧を求めることもしません。なのにどうしてこのようなひどい仕打ちをなさるのです」などと訳すことになるが、恐らく程顥・謝良佐はそのようには読んでいない。

（3）終曰百…用不臧―注（2）に既出。

（4）詩云、鳶…躍於淵―『詩経』大雅・旱麓に「鳶飛戾天、魚躍于淵。豈弟君子、遐不作人。清酒既載、

騂牡既備。以享以祀、以介景福」とある。また、本篇巻中［三四］条に「鳶飛戻天、魚躍于淵、無些私意。上下察、以明道體無所不在。非指鳶魚而言也。若指鳶魚爲言、則上面更有天、下面更有地在。知勿忘勿助長、則知此。知此、則知夫子與點之意」とある。

（5）魚川泳而鳥雲飛―唐 韓愈『韓昌黎集』巻一三「徐泗濠三州節度掌書記廳石記」に「蔚乎其相章、炳乎其相輝。志同而氣合。魚川泳而鳥雲飛也。愈樂是賓主之相得也」とある。

（6）作人―注（4）所引の『詩経』大雅・旱麓に「豈弟君子、遐不作人」の句があり、鄭玄は「遐、遠也。言大王王季之德、近於變化使如新作人」と注する。後に人を任用すること、および人材を養成することを「作人」という。

（7）子思之…下察也―孔子の孫・子思の作とされる『礼記』中庸篇に「君子之道費而隱。夫婦之愚、可以與知焉、及其至也、雖聖人亦有所不知焉。夫婦之不肖、可以能行焉、及其至也、雖聖人亦有所不能焉。天地之大也、人猶有所憾。故君子語大、天下莫能載焉。語小、天下莫能破焉。詩云、鳶飛戻天、魚躍於淵。言其上下察也」とある。

（8）猶孟子…而勿正―「必有事焉、而勿正」は、『孟子』公孫丑上篇にある語。本篇巻上［一二］条注（3）に既出。

（9）故結上…莫能破―注（7）に既出。

（10）莫道―ここでは下の「也」と呼応し、「～はいうまでもなく、たとい……」という句型を構成する。

この句型については小川隆『語録の思想史』（岩波書店、二〇一一）一七八頁を参照。『語類』巻二九にも「天下事那裏被你算得盡。才計較利害、莫道三思、雖百思也只不濟事」とあり、同じく「恁地莫道做好人不成、便做惡人也不成」とある。

余説

程顥が『詩経』を講義する際、訓詁に拘泥しなかったことについては、本篇巻下［九］条にも「伯淳常談詩、並不下一字訓詁。有時只轉却一兩字、點【平聲】掇地念過、便教人省悟。又曰、古人所以貴親炙之也」とある。

［二一］(校1)

本文

問、爲政如何。謝子曰、吾爲縣、立信以示之。始時事煩、吾信既立、今則簡矣。凡事皆與之議而處其方。只如理債、則先約之、息不得過本。(1) 不及本、則計日月償之、又爲之期。期而不還、治其罪。息過本、則不理。凡胥吏稟吾約束者、申爲之約而言不再。期既至而事未集、治其罪、不復縱。凡此皆所以示吾信。余又問、處事何以得其要。謝曰、試擧一端。只如繳引勾到人、便令於引上作三項開説、某人是陳狀、某人是被論、(2) 某人是證見、(3) 即時便見得事。因問、當不用更看元詞。謝子遂言曰、吾每就(校2)事著工夫學。只如喜怒、

遂日消磨、須要去得盡。余問、吾丈應是銷去多時。曰、不遷怒(4)、須是顔子、始做得。假使高聲一句、便是罪過。又曰、任意喜怒、都是人欲。須察見天理涵(校3)養、始得。余又問、變化風俗、如何。謝曰、此事須是他聖人、便有恁地手段。此方風俗至薄惡、欲變易之、吾則未能。子貢稱孔子曰夫子之得邦家者、所謂立之斯立、道之斯行、綏之斯來、動之斯和(5)、須還(6)這老子始得。爲他與天合一、變化在手、便做得恁地事。余又問、孟子云、如欲平治天下、當今之世、舍我其誰(7)。使孟子得志、如何。曰、是他須從法度上做起。變化風俗底事、恐也未了得在。如二南麟趾騶虞之應(8)、須是他文王、始得。

校勘

（校１）本条は四庫全書本にはない。

（校２）朱子遺書本は「就」を「■」とし、和刻本は「就」がない。

（校３）朱子遺書本・和刻本は「涵養」を「含養」に作る。

口語訳

質問した、「政治をするには、どのようにすればよいでしょうか」と。

謝良佐がいった、「私が県の役人になったときは、信を打ち立てて人々に示した。始めは何事につけても煩瑣であったが、私の信がすでに確立されて、いまではすっかり簡素になった。だいたい物事はすべて

人々と相談して方針を定めている。例えば、債務を返済することに関しては、最初に契約した時に、利息が元金の二倍を超えてはならない。二倍に達していない場合は、貸与期間を計算してこれを返済金額とし、さらに返済期日を決める。期日にもかかわらず返済しなければ、その罪を責めて処罰する。利息が元金の二倍を超えている場合は、返済しなくてもよい。だいたい部下が私の取り決めを聞く時は、私はその場で約束し、繰り返し確認するだけで、以後は再びいわない。期日がもう来ているのに仕事が済んでいないならば、裁判にかけてその罪を責め、決して見逃したりしない。これらはみんな私の信を示す手段である」と。

私がまた質問した、「物事を処理するのに、どのようにしてポイントを抑えればよいのでしょうか」と。

謝良佐がいった、「一例を挙げてみよう。例えば、文書を提出して人を逮捕する場合は、文書の上の部分に三つの項目、すなわち誰々が告訴人で、誰々が被告で、誰々が証人であるといったことを明記させておけば、すぐに事が分かるものだ」と。

そこで質問した、「そうすればきっと、もとの文書を読む必要はないでしょうね」と。

謝良佐がそこでいった、「私は何事にも工夫を用いて学んでいるのだ。例えば喜怒などの感情は、毎日毎日減らしていって、すべて除去する必要がある」と。

私が質問した、「先生はきっとこれらを除去し終えて久しいでしょうね」と。

謝良佐がいった、「(『論語』雍也篇にいう)『怒りを遷さず（怒りにまかせて八つ当たりしない）』といい

うのは、顔回であるからこそ、できるのだ。もし一言でも声を荒げることがあるならば、それはあやまちである」と。

またいった、「勝手気ままに喜んだり怒ったりするのは、みんな人欲である。天理をはっきりと認識し包容養育して、始めて顔回のようなことが可能なのである」と。

私がまた質問した、「風俗を変化させることについて、いかがでしょうか」と。

謝良佐がいった、「このことは、かの聖人であってこそ、このような能力があるのだ。もしここの風俗が大変に浅薄であったとして、これを改めようとしても、私にはできない。(『論語』子張篇に)子貢が孔子を称えて『夫子の邦家を得れば、所謂 之を立つれば斯に立ち、之を道けば斯に行い、之を綏んずれば斯に来たり、之を動かせば斯に和す(孔子がもし国家を治めることになれば、いわゆる『立たせれば立ち、導けば歩き、安らげば集まって来、激励すればこたえる)』である』といったのは、やはり聖人であるこのお方であってこそ、それが可能だからである。それは、この方が天と合一していて、(風俗を)変化させることなどは手中にあるようなものなので、このようなことができるのだ」と。

私がまた質問した、「孟子は『如し天下を平治せんと欲せば、今の世に当たりて、我を舎きて其れ誰ぞや(天がもし、天下を平定しようと望むなら、今の世において、私をおいて誰があろうか)』といいました。もし孟子が志望を叶えて天下を治めていたならば、いかがだったでしょうか」と。

謝良佐がいった、「彼はきっと法律制度でもって統治を始めるであろう。風俗を変化させることについ

ては、恐らくは会得していないであろうから。『詩経』周南の「麟之趾」、召南の「騶虞」のような「応（感応・効験）」は、文王の感化があってこそ、可能なのである」と。

注

（1）本―元金。金銭貸借のときの、貸借の金銭。

（2）被論―訴訟の時の被告。

（3）證見―証人。

（4）不遷怒―『論語』雍也篇に「哀公問、弟子孰爲好學。孔子對曰、有顔回者好學、不遷怒、不貳過。不幸短命死矣。今也則亡、未聞好學者也」とある。

（5）子貢稱…之斯和―『論語』子張篇に「陳子禽謂子貢曰、子爲恭也。仲尼豈賢於子乎。子貢曰、君子一言以爲知、一言以爲不知。言不可不慎也。夫子之不可及也、猶天之不可階而升也。夫子之得邦家者、所謂立之斯立、道之斯行、綏之斯来、動之斯和、其生也榮、其死也哀。如之何其可及也」とある。

（6）須還―「須是（～でなければならない）」と同義、「還須」「還應」「須是還他」などとも書かれる。芳澤勝弘「關於〝還他…〟」（『俗語言研究』禅籍俗語言研究会、第五期、一九九八）を参照。

（7）孟子云…我其誰―『孟子』公孫丑下篇にある語。本篇巻上［二］条注（2）に既出。

（8）麟趾騶虞之應―「麟趾」は、『詩経』周南掉尾の「麟之趾」、「騶虞」は、同じく召南掉尾の「騶虞」のこと。「麟之趾」は、『毛詩正義』巻一の小序によると、周南冒頭の「關雎の應」にあたり、「關雎の化」が行われることで天下には非礼を犯すものがなくなり、世が衰えてもその余沢により、まるで麒麟が出現した時のように、公子たちは信厚であると称えた詩篇。「騶虞」は、同じく小序によると召南冒頭の「鵲巣の應」であり、「鵲巣の化」が行われることで人倫が正しくなり、朝廷が治まり、天下が文王の感化を受け、国君が狩猟するに際してもまるで情け深い瑞獣の騶虞のようにことごとくは殺さないと称えた詩篇。

［二二］[校1]

本文

孟子曰、養心、莫善於寡欲。[1] 此一句如何。謝子曰、吾皆亦[校2][2]曾問伊川先生。曰、此一句淺近、不如理義[校3]之悦我心、猶芻豢之悦我口[3]最親切有滋味。然須是體察得理義之悦我心眞箇[4]猶芻豢、始得。明道先生曰、操則存、舍則亡、出入無時、[5] 非聖人之言也。心安得有出入乎。[校4]

校勘

（校1）本条は四庫全書本にはない。

（校２）正誼堂本は「皆」を「昔」に作る。
（校３）正誼堂本は「理義」を「義理」に作る。
（校４）朱子遺書本・和刻本は下に小字注「皆疑作昔」がある。

口語訳

（質問した、）「孟子が『心を養うは、欲を寡くするより善きは莫し（心を養うには、欲を少なくするのが最もよい方法だ）』といいましたが、この一語はいかがでしょうか」と。

謝良佐がいった、「私も、伊川程頤先生にこのことを質問したことがある。先生はおっしゃった、『この一語は深みがなく、（『孟子』告子上篇にいう）『理義の我が心を悦ばすは、猶お芻豢の我が口を悦ばすがごとし（理と義とが私の心を満足させることは、家畜の肉が私の口を満足させるのと同様である）』の語がこのうえなく懇切で味わいがあるのには及ばない。けれども、『理義の我が心を悦ばす』が真に『猶お芻豢の我が口を悦ばすがごとし』であると体認して、始めて成り立つのである』と。明道程顥先生がさらにおっしゃった、『（『孟子』告子上篇にいう）『操（と）れば則ち存し、舍（す）つれば則ち亡す、出入に時無し（心というものは、しっかり持っていればここに存在し、放って置くとなくなってしまう。出入にも決まった時がない）』というのは、聖人の言葉ではない。心はどうして出たり入ったりすることがあろうか』と」と。

注

（1）孟子曰…於寡欲―『孟子』尽心下篇に「孟子曰、養心莫善於寡慾。其爲人也寡慾、雖有不存焉者、寡矣。其爲人也多欲、雖有存焉者、寡矣」とある。

（2）皆―朱子遺書本・和刻本に付される小字注「皆、疑作昔」とあるのに従って解釈する。『河南程氏外書』巻一二に所引の本条も「昔」に作る。

（3）理義之…悦我口―『孟子』告子上篇に「孟子曰、富歳、子弟多賴。兇歳、子弟多暴、非天之降才爾殊也、其所以陷溺其心者然也。……聖人先得我心之所同然耳。故理義之悦我心、猶芻豢之悦我口」とある。

（4）眞箇―ほんとうに、実に、の意。

（5）操則存…入無時―『孟子』告子上篇にある語。本篇巻上［六］条注（5）に既出。

［二三］（校1）

本文

問、從上(1)諸聖、皆有相傳處。至如老子、問如何。謝子曰、他見得錯了。余問、錯在甚處。曰、只如失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮(2)、是甚説話。自然不可易底、便喚做道、體在我身上、便喚做

徳、有知覺識痛癢、便喚做仁、運用處皆是當、便喚做義。大都只是一事。那裏[3]有許多分別。

校勘

（校１）本条は四庫全書本にはない。

口語訳

質問した、「昔日の多くの聖人の教えは、今日まで伝わってきております。老子については、いかがでしょうか」と。

謝良佐がいった、「彼は見誤っている」と。

私が質問した、「どこが誤っているのですか」と。

謝良佐がいった、「例えば『道を失いて後に徳あり、徳を失いて後に仁あり、仁を失いて後に義あり、義を失いて後に礼あり（道が失われてその後に徳が起こり、徳が失われてその後に仁が起こり、仁が失われてその後に義が起こり、義が失われてその後に礼が起こる）』とは、一体なんの話しだ。自然であって変化させることのできないものを道といい、それを体得して自分自身にあるものを徳といい、知覚があって痛癢を知ることができる状態を仁といい、運用するところがすべて適切であるのを義という。これらは、すべてただ一つの事柄なのだ。そんなに多くの区分があるわけがない」と。

注

（1）従上―以前の意の同義複合詞。『臨済録』に「従上諸聖將什麽爲人」とあり、『大慧普覚禅師書』巻二九「答嚴教授【子卿】」に「昔黄檗問百丈、従上古人以何法示人」とある。

（2）失道而…而後禮―『老子』下篇三八章に「上德不德、是以有德。下德不失德、是以無德。上德無爲而無以爲。下德爲之而有以爲。上仁爲之而無以爲。上義爲之而有以爲。上禮爲之而莫之應、則攘臂而扔之。故失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮。夫禮者、忠信之薄、而亂之首。前識者、道之華、而愚之始。是以大丈夫、處其厚、不居其薄、處其實、不居其華。故去彼取此」とある。

（3）那裏―ここでは、現代語の「哪里」に相当し、反語を表す。本篇巻上［二五］条に「吾儒要就上面體認做工夫、他却一切掃除却。那裏得地位進歩」とある。

［二四］

本文

問、莊周如何。謝曰、吾曾問莊周與佛如何。伊川曰、莊周、安得比他佛。佛説直有高妙處。莊周氣象、大故(1)淺近。如人睡初覺時、乍見上下東西指天説地、怎消得恁地。只是家常茶飯。誇逞箇甚底。謝曰、吾曾

歴擧佛説與吾儒同處、問伊川先生。曰、恁地同處雖多、只是本領[2]不是、一齊差卻。余問、本領何故不是。謝曰、爲他不窮天理[校1]、只將拈匙把筯日用底、便承當[3]做大小大事[4]、任意縱横將來作用[5]、便是差處、便是私處。余問、作用何故是私。曰、把來作用做弄[6]、便是做兩般看。當了[7]是將此事横在肚裏、一如子路冉子[8]相似、便被他曾點將冷眼看。他只管獨對春風吟詠、肚裏渾没些能解[9]。豈不快活。余又問、堯舜湯武做底事業、豈不是作用。謝子曰、他做底事業、只是與天理合一、幾曾[10]做作[11]横在肚裏。他見做出許多掀天動地蓋世底[校2]功業、如太空中一點雲相似。他把做甚[12]麽。如子路願乘肥馬、衣輕裘、與朋友共、敝之無憾[13]、亦是有要做好事底心。顔子早是參彼己。孔子便不然。老者合當養底、便安之、少者不能立底、便懷之[14]。君君、臣臣、父父、子子[15]、自然合做底道理、便是天之所爲、更不作用。

校勘

（校１）正誼堂本は「天」を「夫」に作る。

（校２）四庫全書本は「蓋世底」の上がなく、本篇巻上［二〇］条の「所謂必」と繋がっている。

口語訳

質問した、「荘周はいかがでしょう」と。

謝良佐がいった、「私も、荘周の思想と仏教と、どちらが勝っているかについてたずねたことがある。

伊川程頤先生がおっしゃった、『荘周は、かの仏教とは比べものにならない。仏教の説には意外と優れた点がある。荘周の雰囲気は、大いに浅薄である。人が眠りから覚めたばかりの時に、急に上下四方を見回して、天を指して地というようなことなのであって、こんなことに言及する必要があろうか。この種のことは、日常的に起きることである。何をひけらかそうというのか』と」と。

謝良佐がいった、「私は以前、仏教の説とわが儒学の説と同じ点を列挙して、程頤先生にたずねたことがある。先生はおっしゃった、『この通り同じ点は多いのではあるけれど、ただ根本が正しくないので、これらはすべて誤ってしまった』と」と。

私が質問した、「根本は、なぜ正しくないのですか」と。

謝良佐がいった、「かれらが天理を究明しないために、ただスプーンや箸をとるといった日常のことをそのままたいそうな重大事と受け止め、自由奔放に動き回っておいてそれを作用であるなどとする、それが誤っている点であり、利己である点である」と。

私が質問した、「作用は、どうして利己なのですか」と。

謝良佐がいった、「作用を持ち出していじくり回しているようでは、（内心と外界を）二つ別々のこととして認知していることになる。このことで心中が覆われてしまっているならば、ちょうど子路や冉有のように、かの曾点に冷ややかな目で見られてしまうであろう。彼はひたすら一人で春風に向かって吟唱していて、心中にはすこしの技能もなかった。なんと爽快なことではないか」と。

私がまた質問した、「堯舜や湯武が成し遂げた事業は、作用に他ならないのではないですか」と。

謝良佐がいった、「彼らが成し遂げた事業は、天理と合一してこれを行ったのに過ぎないのであって、どうして心中を覆っているものでもって、これを行ったということがあろう。かれらは自身が、多くの、天に翻り地を揺り動かし、天下を蓋うような偉大な業績を成し遂げるのを見ても、天空のなかのわずか一つの雲を見るようであった。かれらはなんとも思っていないのである。しかし、例えば子路が（『論語』公冶長篇で）『願わくは肥馬に乗り、軽裘を衣（き）、朋友と共にして、之を敝（やぶ）るも憾みなけん（肥えた馬に乗り、軽くて暖かい毛皮の服を友人とともに使って、それが傷んでも不満に思わないようにありたい）』といったのは、よいことをしようという心がある。顔回はとっくに相対的見方を混入させてしまっている。孔子はそうではない。養わなければならない老人に対しては、これに孝養を尽くし、一人前でない若者に対しては、これをつき従わせた。『君 君たり、臣 臣たり、父 父たり、子 子たり（君主は君主らしく、臣下は臣下らしく、父は父らしく、子は子らしく）』、自然であってそうすべきであるという道理は、天の行為であって、決して作用ではないのである」と。

注

（1）大故―ここでは、大いに、非常に、の意の程度副詞。唐賢清「《朱子語類》副詞〝大故〟探析」（『船山学刊』湖南省社会科学界聯合会、二〇〇三年第二期）によると、「大故」の副詞用法は宋代

に出現し、元代には「大古」「大古裏」「大古來」などのかたちで使用されるという。『語類』巻一九に「論語一日只看一段、大故明白底、則看兩段」とあり、巻二四に「文振此兩三夜説話、大故精細」などとある。

（2）本領―基づくところ、根本となるもの、本源。『語類』巻一二に「人之爲學、千頭萬緒、豈可無本領。此程先生所以有持敬之語」とある。

（3）承當―真理を自己のものとして担う、己のこととして肯う。『景徳伝灯録』巻一五・洞山良价章に「雲巖曰、承當遮箇事、大須審細」とある。

（4）大小大事―「大小大」は、現代語の「多麼」に相当し、いかばかり、どんなになどの意。田中謙二『『董西廂』にみえる俗語の助字」（『ことばと文学』汲古書院、一九九三）一三八～一四〇頁を参照。『程氏遺書』巻一に「終日乾乾、大小大事、却只是忠信所以進德爲實下手處」とあり、本篇巻中［三七］条に「先生曰、舜傳位與禹、是大小大事。只稱他不矜不伐」などとある。

（5）任意縱…來作用―中唐以降に主流となった馬祖系の禅に説かれる「作用即性（さゆうそくしょう）」説、すなわち見聞覚知などの現実態の作用がそのまま「佛性」「本性」であるとする仏性説を念頭に置く。「作用即性」説については小川隆『語録の思想史』（岩波書店、二〇一一）第一章第一節を参照。

（6）做弄―意識的・作為的にそのことをもてあそぶ。垣内景子・恩田裕正編『『朱子語類』訳注 巻一～三』（汲古書院、二〇〇七）二六八頁を参照。『語類』巻八に「此其病只是要説高説妙、將來做箇

好看底物事做弄」などとある。

（7）當了―未詳。本篇巻上［二五］条に「乍見孺子底、吾儒喚做心、他便喚做前塵妄想。當了是見得大高」とあり、同［五五］条に「曰、當了終須有不透處。當初若不得他一句救拔、便入禪家去矣」とあるが、これらの用例から帰納する限り、確定度の高い推量を表すか。

（8）一如子…子相似―『論語』先進篇にある一章を踏まえている。本篇巻上［一六］条注（17）を参照。孔子が志を問うたのに答えて、子路と冉有は政治家としての功業をもって答えたが、曾点（曾晳）は春に沐浴した後、舞雩の台で風に吹かれて詠って帰りたいと答えた。

（9）能解―才能、技量、技能。『語類』巻九四に「又如龜山説、伊尹樂堯舜之道、只是出作入息、飢食渴飲而已。即是伊尹在莘郊時、全無些能解」とある。

（10）幾曾―反語、「どうして～しようか」の意。『朱子絶句全譯注』第五冊（日本漢詩文學會編、汲古書院、二〇一五）二四九～二五〇頁を参照。『程氏遺書』巻一八に「性中只有仁義禮智四者。幾曾有孝弟來」などとある。

（11）做作―ここでは、作為的に何事かをなす意。恩田裕正「朱子語類訳注（二五）」（『汲古』第七七号、二〇二〇）一三五条の注を参照。『語類』巻二二に「禮是嚴敬之意。但不做作而順於自然、便是和」とある。

（12）把做―「～と見なす」「～と取り扱う」「～とする」の意で、「把作」とも表記される。「把～做…

…」に由来する。『語類』巻一三に「如今人纔説不赴擧、便把做掀天底大事」とある。

(13) 如子路…之無憾―『論語』公冶長篇に「顔淵季路侍。子曰、盍各言爾志。子路曰、願車馬、衣輕裘、與朋友共。敝之而無憾。顔淵曰、願無伐善、無施勞。子路曰、願聞子之志。子曰、老者安之、朋友信之、少者懷之」とある。

(14) 孔子便…便懷之―注(13)に既出の『論語』の語を踏まえる。

(15) 君君、臣…父、子子―『論語』顔淵篇に「齊景公問政於孔子。孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子。公曰、善哉。信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾得而食諸」とあるのを踏まえる。